開始義を表す「起来」「上」「开」の比較研究
—音声描写を伝える表現と共起する場合を中心に—[1)]

郅　鴎

Abstract

According to Chinese grammar rules, “qilai” “shang” “kai” can all show the beginning of a movement or status. But they also have subtle differences in semantics and usage that can be more clearly demonstrated when there is a description of sound, such as onomatopoeia. Sound has characteristics such that it can both describe continuance at a certain time and expandability in a certain space. “qilai” focuses on describing new changes and highlights the new changes that are happening. While “shang” semantically emphasizes the temporal continuance of the new movement or status. Particular emphasis is placed on the stability of the state. And “kai” focuses on the spatial expansibility of the new movement or status.

キーワード……起来　上　开　開始義　音声描写

1　はじめに

現代中国語において、「起来」、「上」、「开」は動詞の後に置かれ、動作・様態の開始を表すことができる。開始義を表す文のなかには、オノマトペが用いられ、音声を伴って開始が合図される分がしばしば見られる。音声は時間的な持続性と空間的な拡散性の両方の特徴を持っている。それ故、音声描写と共起する場合の例文及びその分析を通じて、開始義を表す「起来」、「上」、「开」の相違点はさらに把握しやすくなると筆者は考えている。

本研究では、開始義を表す「起来」、「上」、「开」が置き換えられる場合及び置き換えられない場合の例文を比較しながら、分析を行う。それにより、開始義を表す「V 起来」、「V 上」、「V 开」の特徴及びその共通点と差異を明らかにしたい。

2　先行研究と問題点

「起来」については、呂叔湘(1980)は「起来」は動作の開始及び持続を表すことができると論じている。また、劉月華(1998)は、開始義を表す「起来」常に静態から動態への変化を示すと論じている。丸尾誠（2014）は、「起来」は事態・動作の発生・出現を表すことができると指摘し、「起来」と共起する動詞について分析している。

「上」については、呂叔湘(1980)は「上」は動詞の後に用いられて、その動作の趨向や開始・

継続或いは結果を表すことができると論じている。また、動作の開始・継続を表すとき、焦点はその動作の開始に当てられることも論じている。劉月華(1998)は、「上」の基本的な意味は「低いところから高いところに移動すること」であると指摘している。また、「上」は新たな様態の開始及び動作の開始を表すことができることも指摘している。丸尾誠（2014）は、開始義を表す「上」は動作の実現・ある状態に入ること・ある局面へ移行することを表すことができると論じている。

「开」については、呂叔湘(1980)は「开」は「はなす」、「束縛されない」2 つの意味を持つということを論じている。劉月華(1998)は、「开」は動態から静態への変化しか表せないと主張している。また、「开」と共起できる動詞を言語活動及び音声が出る動作動詞、思惟を表す動詞、一般動詞の三種類に分けている。丸尾誠（2014）は、開始義を表す「开」は「離脱以降の着点が想定されない動きの過程（持続的）」という空間領域の概念を時間領域（起動相~継続相）に転用することを指摘している。また、動詞と共起する場合には、「开」は「移動」「開始」の両義が融合する例が多いことも論じている。

先行研究の検討を通じて、問題点は以下のようにまとめることができる。第一に、「起来」、「上」、「开」に関する個別の研究は多いが、比較研究は少ない。第二に、「起来」、「上」、「开」と共起する動詞に関する研究は多いが、その場合の動詞の修飾語に関する研究は少ない。音声描写に関する研究も少ない。第三に、開始義を表す「起来」、「上」、「开」に関する研究は時間的の持続性についての比較研究は多い。しかし、空間的の拡散性については論じられてはこなかった。本研究はこれら 3 つの問題点を踏まえながら、音声描写を伝える表現と共起する「起来」、「上」、「开」の異同を明らかにする。

3　音声描写について

音声描写とは音声を表す動詞と音声を模倣する語彙を用いることで、物の音や声などを表す表現技巧である。現代中国語では、音声を模倣する語彙は「象声词」と呼ばれる。「象声词」は日本語では、「オノマトペ」と呼ばれる。現代中国語において、オノマトペは連用修飾語となり、後ろに助詞「地」あるいは「的」を用いる構文が多い。つまり、「（副詞）＋オノマトペ＋（地／的）＋（…）＋V」のような構文がよく見られる。では、オノマトペの用例を以下に見てみよう。

(1) “刷”地一鞭子抽在他背上。（万迪鶴《没有准备》）
　（「ピシャッ」と彼の背中に鞭を打ち付けた。）

例文(1)では、波線により下線を引いた「刷」は鞭が背中を叩く音を模倣したオノマトペである。

(2) 我一笑，它马上就汪汪叫上了。（余华《我没有自己的名字》）
（僕が笑った途端に、犬がすぐワンワンと吠え始めた。）

例文(2)では、「汪汪」は犬の声を表わすオノマトペである。「叫」は「叫ぶ・呼ぶ・鳴る」などの意味を含み、人間の声と動物の鳴き声の両方の声を表すことができる。例文(2)の「叫」は「吠える」という意味を表し、「汪汪」は「汪」を反復している。「汪汪叫」は犬が繰り返し「汪」という声で吠えることを伝えている。

(3) 他的嗓门就更大，哇啦哇啦的大喊大叫，震耳欲聋。（陈桂棣 春桃《中国农民调查》）
（彼の声は更に大きくなって、耳を劈くようにワイワイと叫んだ。）

例文(3)に現れるオノマトペについて、武田みゆき(2001)は「哇啦哇啦」は音声と様態両方を描写する文成分であると論じている[2)]。ここでは、「哇啦哇啦」は彼の話の内容ではなく、彼の声のうるささを表現しているものである。また、「哇啦哇啦」はそのうるさい声が聞き手に与えた心理的な印象を表すこともできる。

(4) 不远处咿咿呀呀演奏了一阵秦腔曲牌。（贾平凹《秦腔》）
（少し離れた所でキィキィと秦腔[3)]の曲をひとしきり演じた。）

例文(4)では、「咿咿呀呀」は秦腔の音声を模倣ことだけではなく、その歌声が聞き手に与えた心理的な印象を表すこともできる。「咿咿呀呀」は秦腔を歌う際に、歌声が柔和できめ細かく、抑揚があって滑らかであるという音声特徴を表現しているものである。

オノマトペは物の音や声などを描写する語であり、物事の今現在の様態を表すときよく用いられる[4)]。オノマトペを使って、情報を伝達すると読者に強く生き生きとした印象を与え、臨場感[5)]を与えることができる。それ故、様態を描写する場合には、オノマトペを用いる例文が多い。例文(1) (2)のような音声だけを模する例文もあれば、例文(3) (4)のような音声と様子の両方を表わす例文もある。

現代中国語の常用のオノマトペは次の表 1 のようにまとめることができる。

表 1：現代中国語常用オノマトペ

語形	オノマトペの例
A 式	啊 呀 哇 嗡 咝 乒 乓 呀 吧 梆 咚 轰 哐 哧 喀 嗝 嘟 汪 蹬 咩 喵 哗.....
AA 式	啊啊 呀呀 咚咚 呼呼 嘎嘎 滴滴 汪汪 隆隆 呜呜 咯咯 咩咩 嗷嗷 吱吱 唧唧……
AB 式	咯嘣 锒铛 呜咽 扑腾 刺棱 咕咚 呱唧 咯吱 噗嗤 噗呲 嘿呦.....
AAB 式	叮叮当 滴滴答 咚咚锵 滴滴答.....
ABB 式	扑棱棱 哗啦啦 呼噜噜 叮铃铃 滴答答 呜啦啦 啊呀呀.....
AABB 式	滴滴答答 叮叮咚咚 哼哼唧唧 噼噼啪啪 淅淅沥沥 乒乒乓乓 叮叮当当 叽叽喳喳 ……
ABAB 式	哗啦哗啦 咕咚咕咚 呼噜呼噜 当郎当郎 卡拉卡拉 叮当叮当 轰隆轰隆 咕噜咕噜……
ABBB 式	轰隆隆隆 哗啦啦啦 扑楞楞楞 咕噜噜噜.....
ABCA/B 式	咚得隆咚 锵不隆锵 当里个当 噼通扑通 咭噔咯噔 咭吱咯吱 嘟噜咕噜……
A 里 A/BC 式	叽里咕噜 噼里啪啦 稀里哗啦 哇哩哇啦 呼里呼拉 骨里骨咚.....
ABCD 式	丁零当啷 乒零乓啷 丁玲东珑.....

（筆者作成）

表 1 が示すように、現代中国語のオノマトペは以下のような特徴を有する。第一に、造語成分が単純であるため、同じ音や音節が重なる場合や同一の字を重ねる場合が多い。第二に、語形の数が多い。特に、A 式、AA 式、AB 式及び AABB 式はよく用いられる。ABCA/B 式と A 里 A/BC 式及び ABCD 式は用例が比較的少ない。第三に、現代中国語のオノマトペの音節の変化は豊富である。単音節オノマトペだけでなく、二音節オノマトペも三音節オノマトペも四音節オノマトペもある。第四に、オノマトペを構成する漢字は音声を模倣するだけであり、特に意味は表さない。第五に、オノマトペは名詞と動詞の修飾語としてよく用いられる。

4　音声描写と共起する場合

まず、開始義を表す「起来」、「上」、「开」が互いに置き換えられる例文を見てみよう。

(5) a. 一说到老全,我们两个都呜呜地哭上了。 (余华《活着》)

b. 一说到老全,我们两个都呜呜地哭起来了[6)]。

c. 一说到老全,我们两个都呜呜地哭开了。

（全さんのことが話題になると、僕ら二人はおいおいと泣き始めた。）

例文(5)の「呜呜」は人間の泣き声を表すオノマトペである。「上」は開始義を持ち、泣き始めるという様態を表す。「上」は「起来」あるいは「开」と交換しても、例文(5a)、(5b)、(5c)の文は

いずれも自然な文である。

人間の声だけではなく、動物の鳴き声や事物が発する音声などを伴う開始義を表す際にも、「上」、「起来」、「开」が互いに置き換えられる例文がよく見られる。

(6) a. 天刚麻麻亮，小鸟儿便叽叽喳喳地叫开了。（邱捷《李子长与九曲巷》）
b. 天刚麻麻亮，小鸟儿便叽叽喳喳地叫起来了。
c. 天刚麻麻亮，小鸟儿便叽叽喳喳地叫上了。
(空がちょうど白むころ、小鳥がピーチクパーチクと鳴き始めた。)

例文(6)の「叽叽喳喳」は小鳥の声を表わすオノマトペである。そして、小鳥がよくさえずっているという印象を表すこともできる。つまり、「叽」と「喳」は小鳥の代表的な声として、発音時間はとても短く単調であるので、「叽叽喳喳」は小鳥が繰り返し「叽」「喳」などの音を出して鳴くことを示す。

(7) a. 那火越烧越旺，象爆竹一样劈劈叭叭地响起来了；亮出去几十里地。(郑万隆《古道》)
b. 那火越烧越旺，象爆竹一样劈劈叭叭地响开了；亮出去几十里地。
c. 那火越烧越旺，象爆竹一样劈劈叭叭地响上了；亮出去几十里地。
（あの火はますます勢いよく燃えて、爆竹のようにバチバチと響きはじめ、何キロ先までも光らせた。）

例文(7)は事物の発する音を描写する文である。オノマトペ「劈劈叭叭」は「劈叭」（「パン・パチン」）の意味と同じく、破裂や物をたたく時の音を表す。「劈劈叭叭」は「劈叭」の反復である。音声動詞「响」は音や声を出すという意味である。つまり、「劈劈叭叭」は爆竹が連続して破裂した際の音を描写する。

(8) a. 你一言我一语的说什么话的都有，软的硬的什么样态度的都有，在他这个家里乱乱哄哄地闹起来了。（刘流《烈火金刚》）
b. 你一言我一语的说什么话的都有……在他这个家里乱乱哄哄地闹上了。
c. 你一言我一语的说什么话的都有……在他这个家里乱乱哄哄地闹开了。
（みな我も我もと何でもかんでも言うし、その態度も居丈高なものから低姿勢なものまでいて、彼の家でわあわあと騒ぎ始めた。）

例文(8)では、「乱乱哄哄」は議論の内容や話などではなく、音声がわあわあと騒がしいことや人たちの気持ちが混乱することを表すものである。

以上の例文から、「起来」も「上」も「开」も基本的には開始義を表し、入れ替えが可能である。しかし、三者の間にはそれぞれ細かなニュアンスの違いがある。

劉月華（1998）は、「起来」の本義は「接合する・連結する」という意味であると説明する。開始義を表すとき、「起来」は古い様態と新たな様態の変化を示す。「上」の本義は「接触する」という意味である。それ故、開始義を表す「上」は動作主が新たな様態に「触れる」ことを示す。「开」の本義は「開く・通す」という意味であり、内部や一つの点から広がることを表す。開始義を表すとき、「开」は新たな様態の勢いが強くなることを示す一方、新たな様態の影響が大きくなることも示す。そのため、開始義を表す「起来」、「上」、「开」が互いに置き換えられない例文がしばしば見られる。以下に実例を挙げて説明する。

(9) a. 史火龙全身酸麻难当，忍不住大声："啊哟，啊哟"的呻吟起来。(金庸《倚天屠龙记》)
b.*史火龙全身酸麻难当，忍不住大声："啊哟，啊哟"的呻吟上。
c.*史火龙全身酸麻难当，忍不住大声："啊哟，啊哟"的呻吟开。
（史火竜は全身的にわたる痺れに耐えられずに、大声で「ああ」と呻き声を出し始めた。）

例文(9)の「啊哟，啊哟」は人間の声を描写するオノマトペである。文の焦点は史火竜が我慢する様態から、我慢せず呻く声を出す様態になることである。それ故、例文(9a)の「起来」は適格と判断される。「上」は様態の持続に焦点を当てるので、「呻吟上」は(9b)では用いられない。また、「呻吟」という動詞自体は音量も小さくて拡散性も弱いことを表す。たとえ、絶対的な音量が大きかったとしても、「呻吟」は「开」と共起しにくい。それ故、例文(9a)は自然であるが、例文(9b)と例文(9c)は不自然な文と判断される。

さらに、同じ音声動詞であっても、「上」、「起来」、「开」がお互いに置き換えられない例文もある。次の例文を見てみよう。

(10) a. 学员哇地叫起来了："擒敌技术管用，是门神功！"（卜金宝《武警女教官异国竞风流》）
b.*学员哇地叫上了："擒敌技术管用，是门神功！"
c. 学员哇地叫开了："擒敌技术管用，是门神功！"
（生徒はワーッと叫び始めた。「その敵を捕らえる技術は本当に役に立つ！不思議だ！」）

例文(10)は、例文(6)と同じく音声動詞「叫」が用いられているが、オノマトペ「ワーッ」は単音節である。「哇」の発音は単調なので、例文(10)のなかで発話語として用いられる。そして、「哇」の発音は時間的な持続性が弱い。それ故、「哇」は「上」と共起しにくい。

(11) a. 当他们经过的时候，叶子和柔枝都沙沙地响起来了。（林桦《安徒生童话故事集》）

b.*当他们经过的时候，叶子和柔枝都沙沙地响上了。

c.*当他们经过的时候，叶子和柔枝都沙沙地响开了。

（彼らが通ると、木の葉と柔らかい枝はカサカサと音をたて始めた。）

例文(11)は物事の音声を描写する文である。「沙沙」は葉や枝がこすれあう音を表すオノマトペである。例(7)では例(11)と同じく「响」が用いられている。例文(7)では、「起来」も「上」も「开」も自然であるが、 (11b)と(11c)が示すように「沙沙地响上」と「沙沙地响开」は不自然である。まず、「响」という動詞は、音量が大きくて音声の持続が短いことを表す。例文(7)の「劈劈叭叭」は音量が大きく音の拡散性が強いことを表すので、「响」と共起しやすい。一方、例文(11)の「沙沙」は、砂を踏む音や風にそよぐ葉や枝がこすれあう音や水・雨の音などを表すため、発音時間が短く、拡散性も弱く音量も小さい。開始義を表すとき、「起来」は動作・様態の開始しか重視しない。それに対して、開始義を表す「上」は新たな動作・様態持続性を重視する。また、開始義を表す「开」は動作・様態の拡散性を重視する。以上の理由により、「劈劈叭叭」は「起来」、「上」、「开」のいずれとも共起できるが、「沙沙」は「起来」としか共起できない。

5　「起来」、「上」、「开」と共起できる音声動詞について

現代中国語において、音声を表す動詞は「音声動詞」と呼ばれる。音声動詞のなかで、最も頻繁に使われるのは単純な音声を表す動詞である。それに対して、人間の発話行為を表す動詞もある。この種類の動詞は人間の言葉や話を表すことができる。さらに、一部の連語も音声を表すことができる。

CCL[7)]の例文を分析すると、開始義を表す「起来」、「上」、「开」と共起できる音声動詞類は以下の表のように分類することができる。

表 2 :「起来」、「上」、「开」と共起できる常用音声動詞

	単純な音声を表す	人間の発話行為を表す	連語
「起来」と共起できる常音音声動詞	喊 叫 吼 呼 嚎 哭 泣 笑 响 敲 嚎叫 叫唤 吼叫 哭泣 啜泣 抽泣 哭嚎 哭叫 呜咽 抽咽 嬉笑 欢腾 呻吟 咳嗽 呼啸 狂啸 长鸣 轰鸣 回荡…… (47 例)	喊 叫 吼 唱 呼 嚷 说 讲 问 谈 念 读 吟 扯 提 聊 劝 骂 吵 念 说 怪 数 嚎叫 叫唤 呻吟 争辩 埋怨 训斥 批评 数落 开导 打听 猜测 商量 嘀咕 唠叨 支吾 咆哮 交谈 叫喊 吆喝 呜咽 叹息 审问 喊叫 哭叫 交流 交谈 结巴 叫嚷 讨论 议论 争论 演唱 吟诵 吟咏 责问 追问 责备 争论 争辩 质问 招呼 喧哗 哼唧…… (89 例)	打（喷嚏/呵欠/呼噜） 拉(家常) 拌（嘴） 摆（龙门阵） 作（报告） 发（言/牢骚） 翻（旧账） 搭（话） (11 例)
「上」と共起できる常音音声動詞	叫 吼 喊 哭 笑 闹 咳嗽 叫唤 吆喝 哼唧 …… (17 例)	唱 吹 读 聊 说 吵 骂 扯 讲 吼 喊 念 评 谈 问 叫唤 交谈 吆喝 议论 唠叨 哭叫 数落 哼唧…… (43 例)	拉(家常) 打（招呼/嘴仗） 打（呵欠/呼噜） (5 例)
「开」と共起できる常音音声動詞	喊 叫 吼 嚎 哭 笑 响 传 扬 吆喝 咳嗽 咆哮…… (33 例)	喊 叫 吼 唱 呼 嚎 嚷 说 讲 猜 侃 念 读 扯 聊 骂 吵 谈 安慰 辩论 议论 争辩 争论 埋怨 训斥 审判 数落 责备 谩骂 嘟囔 猜测 商量 嘀咕 唠叨 念叨 支吾 咆哮 数落…… (67 例)	打（喷嚏/呵欠/呼噜） 拉(家常) 发（牢骚） (6 例)

（筆者作成）

表 2 から明らかなように、次の 3 つの事実が確認できる。第一に、「起来」と共起できる音声動詞の数が最も多い。それに対して、「上」と共起できる音声動詞の数は最も少ない。音声動詞と共起する場合には、「开」が音声の開始と拡散両方の意味を把握するため、拡散性が弱い音声動詞は「开」と共起しにくい。それ故、「起来」の応用範囲は「上」、「开」より広いということがわかる。第二に、「起来」、「上」、「开」と共起できる音声動詞には、人間の声（発話行為）を表す動詞の数が最も多い。連語の場合も同じである。その理由は、中国語のなかで、人間の声を表す動詞の数が豊富であるからである。例えば、「叫ぶ」を表すとき、音量や話し手などによって、用いられる音声動詞が変わる。それに対して、動物の鳴き声や事物の音を表す動詞は相当に少ない。例えば、小鳥の鳴き声も犬の吠え声も「叫」で表される。また、爆竹の音も草木の音も「响」で表される。第三に、「起来」、「上」、「开」のいずれもと共起できる音声動詞に関し

ては、人間の発話行為を表す動詞の場合には、「说」「讨论」のような感情表現が弱いものが多い。また、「叫」「响」のような色々な音声を表すことができる動詞も「起来」、「上」、「开」と共起しやすい。

ところで、音声動詞だけが使われる場合には、「起来」、「上」、「开」の違いが不明瞭な場合があるが、オノマトペが開始義を表す「起来」、「上」、「开」と共起すると互いの違いが明らかになる。

なお、オノマトペを発音時間・音量・音声内容によって分類すると次の表 3 のようになる。

表 3：発音時間・音量・音声内容によるオノマトペの分析

比較項目 / オノマトペ	発音時間		音量		音声内容	
	短い	長い	小さい	大きい	単調	複雑
唰(事物)	○	×	○	×	○	×
汪汪(動物)	○	×	×	○	○	×
咿咿呀呀(人間)	×	○	○	×	×	○
哇啦哇啦(人間)	×	○	×	○	×	○
呜呜(人間)	×	○	○	○	○	×
叽叽喳喳(動物)	×	○	○	×	×	○
乱乱哄哄(人間)	×	○	×	○	×	○
劈劈叭叭(事物)	×	○	×	○	○	×
啊哟(人間)	○	×	×	○	○	×
哇(人間)	○	×	×	○	○	×
沙沙(事物)	○	×	○	×	○	×

（筆者作成）

表 3 では、「○」はその特徴を有することを示す。「×」はその特徴を有さないことを示す。表 3 から明らかなように、まず、発音時間が短いオノマトペは音声内容が単調な場合が多い。それに対して、発音時間が長いオノマトペは音声内容が複雑な場合が多い。次に、音量の大きさは発音時間や音声内容に関わらず、共起するオノマトペの種類及び文の内容によって決まる。また、事物の音・動物の鳴き声を表すオノマトペは「沙沙」「汪汪」のように音声内容が簡単な場合が多く、人間の声を表すオノマトペは「咿咿呀呀」「乱乱哄哄」のように内容が複雑な場合が多い。

6　おわりに

「起来」、「上」、「开」が開始義を表すとき、ニュアンスの違いがある。「起来」と「上」は時間的な視点、「开」は空間的な視点。音声描写の表現と共起する場合には、「起来」は音声を発すること及びその瞬間の様態を表す。音声が大きくなることや広がることを示すこともできる。「上」は長く続ける音声や切迫した音声が繰り返されることを表す。特に、「上」は音声が暫く持続することを示す。「开」は音量が大きくなって、音声が広がることを表す。

開始義を表す場合、「起来」、「上」、「开」の異同は次のようにまとめることができる。開始義を表すとき、「上」は様態が時間軸に従い持続すること（持続＞変化＞拡散）に焦点を当てる。「起来」は様態が時間軸のある点から変化すること（変化＞持続＞拡散）に焦点を当てる。「开」は時間的な持続も空間的な展開（拡散＝持続＞変化）に焦点を当てる。

今後は開始義を表す「起来」、「上」、「开」と共起する形容詞の特性について解明したい。

＜注＞

1) 本稿は筆者が日本中国語学会第 67 回全国大会(2017 年 11 月　中央大学多摩キャンパス)に発表した内容に基づいている。
2) 武田みゆき（2001:p.112）によれば、「哇啦哇啦」自体は、音声そのものではなく、音声の様態を描写している。」と説明されている。
3) 相原茂(2002:p.1261)中国の西北地区（陝西・甘粛省など）一帯の地方劇。「陝西梆子」ともいう。
4)小野正弘（2007:pp.20-21）によれば、「水面がきらきら日光を反射していた」というと、ずっと続いている感じがします。いつ始まって、いつ終わるのかは分からないけれども、とりあえず、いま、そうなっている最中だ、という感じでしょうか。……前に述べたように、「きらきら」だとすぐ目の前で起こっているような臨場感がある感じがします」と説明されている。
5) 小松孝徳　清河幸子　秋山広美(2009:p.752)によれば、「オノマトペは物体の音の響きやその状態などを感覚的に表現したものであるため、一般語彙と比べると臨場感にあふれ、繊細な表現を可能としているという特徴がある」と説明されている。
6) 本稿において、出典が明記されていない例文と日本語訳は筆者によるものである。
7) CCL は中国の北京大学による言語資料データベースである。
URL：http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai

＜参考文献＞

相原　茂　2002,『中日辞典第二版』, 講談社。
相原　茂　2002,『漢語学習辞典』, 朝日出版社。
荒川清秀　2003,『一歩すすんだ中国語文法』, 大修館書店。
荒川清秀　2015,『動詞を中心にした中国語文法論集』, 白帝社。
耿　二嶺　1986,《汉语拟声词》, 湖北教育出版社。
龔　良玉　1991,《象声词词典》, 贵州教育出版社。
胡　暁慧　2012,《汉语趋向动词语法化研究》, 广西师范大学出版社。
劉　月華　1998,《趋向补语通释》, 北京语言文化大学出版社。
呂　叔湘　1980,《现代汉语八百词》, 商务印书馆。
梁　銀峰　2007,《汉语趋向动词的语法化》, 学林出版社。
丸尾　誠　2005,『現代中国語の空間移動表現に関する研究』, 白帝社。
丸尾　誠　2014,『現代中国語方向補語の研究』, 白帝社。
小野正弘　2007,『日本語オノマトペ辞典 ：擬音語・擬態語 4500』, 小学館。
武田みゆき　2001,「中国語にみる共感覚比喩についての一考察—擬音語の擬態語化をめぐって—」,『ことばの科学』14 号, 名古屋大学言語文化部言語文化研究会, pp, 112-118。

小松孝徳・清河幸子・秋山広美　2009, 「ユーザの直感的表現を支援するオノマトペ表現システム」, 『電子情報通信學会論文誌』11 号, pp.752-763.
高瀬利恵子　2003,「現代中国語における補語“上”の状態義」,『平井勝利教授退官記念・中国学・日本学論文集』, 白帝社, pp, 188-203。
朱　継征　1993,「中国語動詞の『動相』と『静相』について」,『教学』15 号,日中学院出版局, pp, 25-38。

主指導教員（朱継征教授）、副指導教員（大竹芳夫教授・土屋太祐准教授）